

研 究 紀 要  
第 24 号

史跡二ツ森貝塚から出土した狩猟具刺突痕のあるシカ上腕骨について

1~4

高部 由夏（七戸町教育委員会）

小山 彦逸（七戸町社会生活課）

斎藤 慶吏（青森県教育庁文化財保護課）

秦 光次郎（青森県埋蔵文化財調査センター）

津軽ダム関連遺跡群の縄文時代石器・石製品製作

5~23

齋藤 岳（青森県埋蔵文化財調査センター）

川原平(1)遺跡の石器・石製品、土器について

24~34

齋藤 岳（青森県埋蔵文化財調査センター）

岡本 洋（青森県立郷土館）

2019.3

青森県埋蔵文化財調査センター



## 史跡二ツ森貝塚から出土した狩猟具刺突痕のあるシカ上腕骨について

高部 由夏（七戸町教育委員会）

小山 彦逸（七戸町社会生活課）

齊藤 慶吏（青森県教育庁文化財保護課）

秦 光次郎（青森県埋蔵文化財調査センター）

### はじめに

狩猟具刺突痕のある動物遺体については、全国各地から二十数例以上にのぼる報告があり、近年はX線CT撮影画像に基づく各種分析や考察が加えられている例も少なくない（熊谷2001、宮腰ほか2011、山崎ほか2014）。その一方で、青森県内ではこれまで同種の資料の存在はほとんど知られておらず、二ツ森貝塚から出土した狩猟具刺突痕のみられる獸骨資料は、部位と動物種の特定が可能なものとして、現時点では県内唯一の資料である<sup>※1</sup>。本資料が発見された昭和50年の調査については、正式報告が未刊行の状態であるが、資料の重要性を鑑み、これまでに判明している概要をまとめてここに報告するものである。

なお、本資料についてはこれまで二ツ森貝塚を紹介するリーフレット等で「イノシシの上腕骨」という説明を与えてきた経緯がある。七戸町指定文化財「二ツ森貝塚出土の考古学資料」（平成30年2月19日告示第14号）でも「獸骨」とし、動物種を明確にしていなかったが、本資料が「シカの上腕骨」であることが今回確認されたため、本稿ではそのように表記し、報告するものである。

### 1 発見の経緯と出土地点、帰属時期

本資料は、平成17年に七戸町教育委員会（当時）の上野司氏によって、七戸町発掘調査整理作業所に保管されていた昭和50年の天間林村教育委員会発掘調査資料から偶然見出されたものである。その後、前述したとおり刊行物等に写真掲載され、県内の博物館施設の企画展示にも活用してきた。

資料を収納していた袋には油性ペンによる調査年の記入がみられたが、出土地点や層位に関する記載はない。昭和50年の調査は東地区と西地区の二地点で実施されているが、資料の多くは未整理で本資料の出土状況についての記録も未確認である。ただ、資料自体に顕著な風化がみられず非常に良好な保存状態であることから、発掘調査で発見されるまで貝層中に埋存していた可能性が高い。二ツ森貝塚ではこれまでに実施された確認調査で円筒下層d式から複林式期の貝層が検出されている。そのため、資料の帰属時期は、縄文時代前期後葉から中期後葉のいずれかと推測される。

### 2 動物種・部位、その他観察所見

部位は左側上腕骨の近位部で、小結節前部に発掘調査時に生じたと考えられる欠損がみられる。動物種については、現生標本との比較からシカと同定した。残存近位端幅65.4mm、近位端厚(Bd<sup>※2</sup>)82.1mmで重量は46.9gである。

上腕骨頭端と上腕骨頸に浅い線状の傷が複数観察され、解体痕の可能性がある（写真3）。また、骨幹部には発掘調査時に生じた新鮮な割れ面と当初の廃棄以前、おそらくは調理の際に形成されたで

あろうスパイラル状の破断面が確認できる（写真4）。後者は、打点が不明瞭ながらも人為的な加撃に伴って形成された可能性が高く、骨髓を利用する目的で骨を打ち割る行為が加えられたものと考えられる（小野2001）。

狩猟具の貫入痕は上腕骨頭から大結節間の位置にみられる。先端部が骨の中に折れ残った状態であり、レンズ状の破断面を貫入部から観察することができる（写真5）。断面形状とサイズから石鎌の可能性が高いと判断したが、刺突の方向や狩猟具の形状について、より詳細な情報を得るために、軟X線撮影を実施することとした。

### 3 軟X線撮影

撮影には、青森県埋蔵文化財調査センターで所有するエクスロン社製X線検査装置SMART160E/0.4を中心としたシステムを用いた。撮影条件は、写真2左については35kvp - 2.0mA、同右は40kvp - 2.0mAで、ともに1分間の照射を行った。更に貫入石鎌を際立たせるため、撮影フィルムからデジタルスキャン画像を作成して画像補正を施している。こうして得られたシカ上腕骨頭のX線写真が写真2で、小結節側を写真手前としたのが写真2左、その裏面からの撮影が写真2右で、共に骨頭端が写真上方となる。

貫入石鎌の位置は赤丸で示したが、やや不鮮明な写りとなっている。これは骨頭部の厚みにより透過距離が長くなり、石鎌の薄さと相俟って同程度の透過具合になったためと考えられる。特に写真2左では石鎌尖端側、写真2右では基部側において、骨質が石鎌を上回る不透過具合となっている。これにより外形の特徴を十分に明らかにすることはできなかったが、骨表面から約1cm潜り込んでいる様子は捉えられた。

### まとめ

貫入部から観察される石器の色調は黒色で光沢が鈍く、瑪瑙、玉髓といった白色系の石材の可能性は低い。光沢が乏しいことをふまえれば、黒曜石の可能性も排除され、黒色系の頁岩とみられる。基部が欠損しているため、全体形状は不明であるが、貫入部のサイズおよび軟X線撮影で確認された鋭利な端部形状から最大幅10mm前後の石鎌とみられる。

石鎌の貫入によって生じた割れ口に、骨増殖の痕はみられない（写真5）。そのため、弓矢が刺さったシカは逃げ延びることなく、そのまま捕殺されたと考えられる。軟X線撮影によって明らかとなった石鎌の主軸から投射角を推測すると、入射方向は頭を上げた立位状態で、対象獣の右前方、やや上位側からであった可能性が高い（図1）。崖上から斜めに見下ろす位置から獲物を狙って弓矢が放たれたか、あるいは、落とし穴に挟まり、身動きのとれない状態で矢が射込まれたか、いくつかの状況が考えられる。また、上腕骨の近位部は胸に近い前脚肩付近の位置に相当するため、正面から胸のあたりに狙いを定めていた可能性も考えられる。

本資料は、二ツ森貝塚に暮らした人々がどのような狩猟を行っていたか、その様子を具体的に物語る貴重なものである。今後も類例を探索して比較検討を行い、狩猟法解明に向けた多方面からの分析が望まれる。

## 引用参考文献

- 阿部 恵 1985 「石鏃のささる獸骨—宮城県田柄貝塚」『季刊考古学』11
- 岡村道雄 1984 「鹿の肩甲骨にささったエイ尾棘製のヤジリ」『東北歴史資料館報』13
- 小野 昭 2001 『打製骨器論』 東京大学出版会
- 加藤嘉太郎・山内昭二 1995 『改著 家畜比較解剖図説 上巻』 義賢堂
- 熊谷 賢 1996 「三陸町宮野貝塚出土狩猟の痕を残すイノシシの頭骨について」『陸前高田市立博物館紀要95』
- 熊谷 賢 2001 「狩猟具の貫入した動物遺存体」『考古学ジャーナル』468
- 七戸町教育委員会 2007 『二ツ森貝塚－範囲確認調査報告書－』 七戸町埋蔵文化財調査報告書第71集
- 八戸市教育委員会 2018 『史跡是川石器時代遺跡発掘調査報告書II－平成26・28・29年度一王寺遺跡史跡内容確認調査報告書－』 八戸市埋蔵文化財調査報告書
- 宮腰健司・山崎 健・大河内隆之・原田 幹 2011 「朝日遺跡から出土した石鏃の刺さったシカ腰椎について」『研究紀要』12 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- 山崎健・丸山真史・菊池大樹・江田真毅・松崎哲也・三輪みなみ 2014 「第V章 自然科学分析 18 脊椎動物遺存体」『小竹貝塚発掘調査報告 第二分冊 自然科学分析編』 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告 第60集
- Driesch, A. von den. 1976 *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites.* Peabody Museum Bulletin 1.

注)

※1 動物種・部位が不明な資料としては一王寺遺跡にも報告がある（八戸市教育委員会 2018）。

※2 計測点は Driesch 1976 による。

## 謝辞

本稿の作成にあたり、下記の方々よりご教示・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。  
上野 司、小笠原雅行、杉山陽亮、田中珠美、福田友之。



写真1 ニツ森貝塚から出土した狩猟具刺突痕のみられるシカ上腕骨

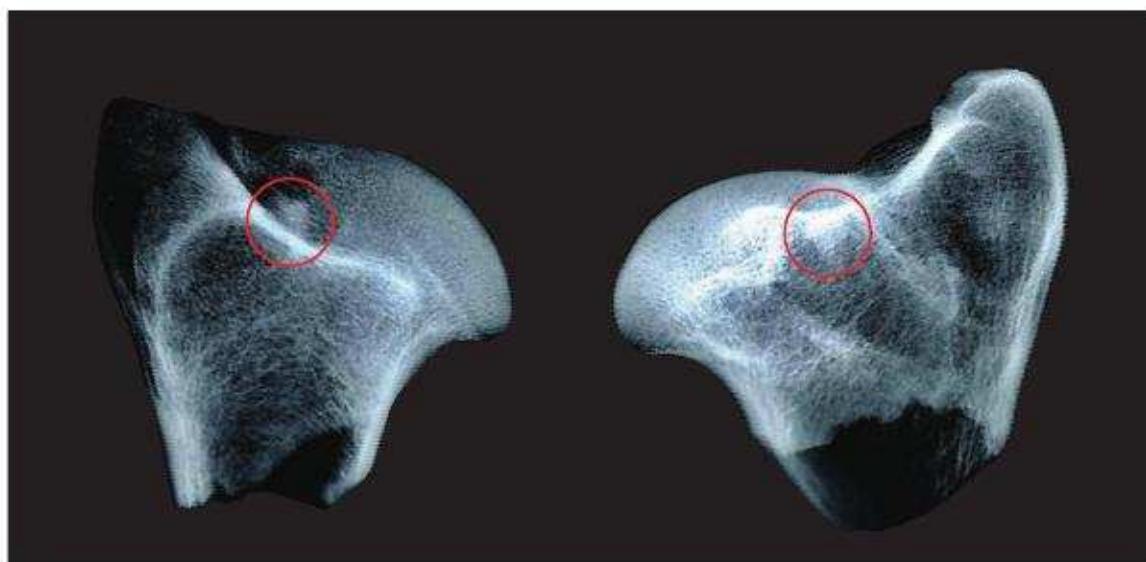


写真2 軟X線撮影画像



写真3 解体痕の可能性のある線状痕

写真4 人為的な打ち欠きによって生じたスパイラル状の破断面

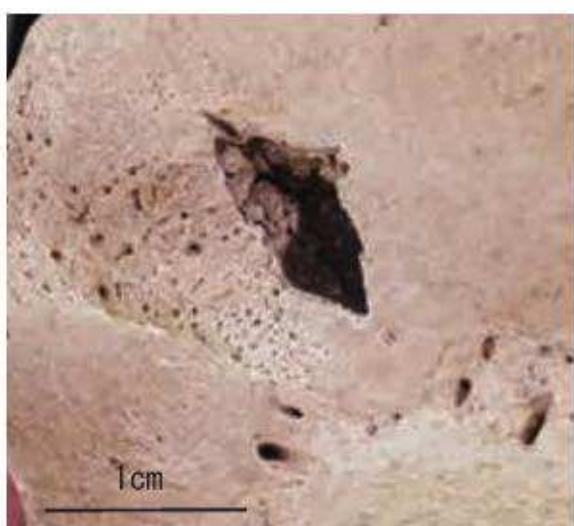


写真5 狩猟具刺突痕の貫入部（拡大写真）

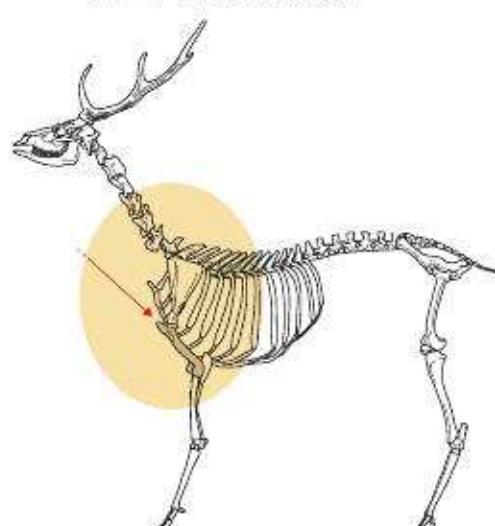


図1 想定される矢の投射方向

## 津軽ダム関連遺跡群の縄文時代石器・石製品製作

齋藤 岳（青森県埋蔵文化財調査センター）

### はじめに

津軽ダム関連遺跡群（以降、「遺跡群」とする）は青森県中津軽郡西目屋村の岩木川上流域に位置している。青森県教育委員会は事業区域内で平成3年度に分布調査を行い、大川添（1）遺跡など7か所の新規遺跡を登録し、砂子瀬遺跡の範囲拡大をおこなった（青森県教委 1992）。その後、青森県埋蔵文化財調査センターは、平成15年度から発掘調査に着手し、平成27年度までの13年間で17遺跡の調査を行った（表1）。遺跡群は同一遺跡の発掘調査報告書が複数回にわたることがあり、同一年に複数冊刊行されてきた。そのため、本稿では、出典は表1記載の青森県埋蔵文化財調査報告書の集号によることとする。また、2016・2017年3月の報告書刊行分に関しては3年以上にわたる調査をまとめたものが多く、遺構数や調査面積の重複が大きいため、表1ではアミをかけて表示した。

2017年3月に水上（2）遺跡と川原平（1）遺跡の中核部分の発掘調査報告書が刊行されたことにより、全遺跡の報告書刊行が完結した。平成30年度には、遺跡群の調査成果を青森県民に還元する企画展示が青森県立郷土館で開催された。企画展示図録は、一般県民に、わかりやすく調査成果をつたえるものであり、全遺跡の概要がわかる資料編が付されている（青森県立郷土館 2018）。

遺跡群は、ダム建設に伴う水没遺跡の全面調査という性格上、集落の全体像のみならず、土器・石器の組成などの重要な情報が全数として得られる。縄文時代草創期から晩期まで、各時期の集落が調査されており、相互比較により時代性を抽出できる（以降、縄文時代を略して記述する）。調査開始から終了までの期間が長く、報告者とその考え方も様々なために掲載遺物の選択基準や着眼点に差があると感じられるものの、定形石器や磨製石斧は、概ね丁寧な報告がなされていると思われる。特に水上（2）遺跡と川原平（1）遺跡の2017年報告の総括部分（575集第6分冊・580集第二分冊）が重要である。しかし、刊行後の継続調査で訂正の必要な部分がある（註1）。遺跡群全体の石器・石製品の総括はなされておらず、今後に委ねられている。

筆者は、遺跡群の生業基盤として、狩猟採集に適した立地の良さがあると考えている。平坦地の広い盆地状の集落適地としては岩木川最上流に位置する点にあると考えている。一定規模の集落の維持にあたっては、クリをはじめとする利用植物の管理が可能な後背地が必要となる。遺跡群よりさらに上流では、平坦地は存在しても、安定した集落を維持できるだけの後背地は確保できないと筆者は考える。遺跡群から見て、特に上流側は狩猟採集のテリトリーが広大である。他の集落と競合することがないため、山の恵みを享受できる環境として有利な場所といえる。また、川筋は道となる。津軽平野部からは、縄文時代においても岩木川支流の平川を通り大館方面へ抜ける道（概ね現在の国道7号線の経路）、小坂町・鹿角市方面へ抜ける道（概ね現在の東北自動車道の経路）があったと考えられるが、遺跡群から南に峠を越えればアスファルトを産する秋田県能代市駒形や潟上市榎木、そして日本海に面した米代川下流域のある秋田県西部域と最短距離で行き来ができる。他の経路よりも峠は急であるが、交易の点でも優位である（図1）。川原平（1）遺跡からはアスファルト塊、その搔きとりに使用されたと考えられる付着剥片、石匙・石鎌・石製円盤での付着数は他の遺跡に比べて明らかに多い。

本遺跡を経由して、津軽地方各地に運ばれたアスファルトが多いとすれば、その集散地の可能性がある。アスファルトの流通ルートについては、川筋や峠など陸路での運搬ルートの図が示され、「その他の各地の産物の物流についても、これらのルートを利用して行き交ったと想定されます。」と記載されたことがある（御所野縄文博物館 2017）。津軽平野部からは岩木川支流の平川を通り大館方面へ抜ける道が図示されたが、川原平（1）遺跡で多量のアスファルト関連遺物が報告されたことから、今後は、西目屋村の遺跡群を経由するルートも示されていくと思われる。また、長田友也は硬玉産地から大消費地である東北北部までの縄文時代晚期の陸路を中心とした図を示している（長田 2018）。川原平（1）遺跡と隣接する川原平（4）遺跡の縄文時代晚期の土坑墓からの硬玉製品の出土についても、アスファルトとともに陸路を通じて秋田方面からもたらされた可能性がある。しかし、それだけでは青森県内で青森市三内丸山遺跡の4万箱に次ぐ遺物出土量2位の7,449箱出土した川原平（1）遺跡、3位の水上（2）遺跡6,723箱が出土する要因の説明とはならない。また、青森県内各地で大きな集落が形成される前期中葉の円筒下層a・b式期集落は遺跡群では見当たらない。そのことについても説明できる仮説が必要である。

筆者は、その答として、遺跡群が珪質頁岩や凝灰岩、赤色顔料の産地であり、石器・石製品等の製作が行われ、組織的な製作と搬出が軌道に乗った時期に、集落が安定・大型化すると考える。ヒスイ等の遠隔地の产品が搬入され、遺物量だけではなく、出土品の内容が多岐にわたる。それは、前期末～後期初頭の水上（2）遺跡の時期と後期後葉～晚期後葉の川原平（1）遺跡の時期に顕著である。本稿ではその根拠を、主に遺跡群の調査内容から示すこととしたい。対応する搬出先の地域の遺跡の石器・石製品の状況は、川原平（1）遺跡の総括でも、筆者は踏み込めなかった（580集）。今後刊行されていく発掘調査報告書記載内容の充実により、搬出先の地域で遺跡群と対応する事項が押さえられれば、さらに根拠を積み上げることができる。本稿では、そのための問題提起を行いたい。

## 1 石器製作遺跡群としての認識の発生・問題提起

### （1）石器・石製品の数量

まず、遺跡群での石器・石製品の数量が多い事を記す。発掘調査報告書では、出土時点の段ボール箱数が土器と石器に分けられて記載される場合と、一括されている場合がある。整理作業により、器種ごとに数量化される場合は、精度の高い数値となる。

遺跡群最多の7,449箱出土した川原平（1）遺跡では南捨場を中心とした地区（564集）では石器・石製品は合計1,131箱の内404箱（約36%）、第1号盛土遺構と西北端部（565集）が合計392箱の内161箱（約41%）である。2017年度刊行となった2014年度の出土品のうち漆製品等を除き、土器・土製品が2,658箱に対して石器・石製品が1,476箱（両者合計4,332箱のうち約36%）である。2015年度には、石器はすべて現場で水洗いをして、定形・不定形石器と掲載候補の石核を抽出した。カードや袋の統合を行い、礫石器から不要礫を除外した。この年は土器・土製品が1,147箱、石器・石製品が407箱（両者合計1554箱のうち約26%）である。時代性と地域性がかかわるため、適当な比較対象を示せないため箱数からは、石器・石製品量は「多い」としかいえない。また、土器には土が付着しており、土器1箱の実質重量よりも、石器1箱の重量の方が多い可能性がある。

しかし、後述するように、最初の調査区（409集）で珪質頁岩製の剥片総重量が剥片石器総重量の

約31倍であることが報告されている（岡本2006）。筆者も、川原平（1）遺跡の南捨場を中心とした地区（564集）の石器については数量化した。概数では珪質頁岩製の石核は194kg、原石17kg、剥片1,106kgで、その合計重量は1,317kgである。剥片石器合計は126kgであるため10倍以上である。

水上（2）遺跡は前述のとおり遺跡群で2番目に遺物量が多いが、中核部分である報告書IIIの報告範囲では、土器が27,992kg、剥片は4,177kgである。その他の石器は点数化されているが、石核が8,304点である事を考えると、剥片・石核類の総重量は、「多い」といえる。中期中葉～後葉主体の鬼川辺（3）遺跡は遺物数量のグラム単位での記載がなされている（541集）。遺物ごとに数量化されている場合は、遺物取り上げ時の箱数の中から不要な礫が除かれていると考えられるため、数値の信頼性は高い。総重量は土器113,514.8g、礫石器67,618g、剥片石器2,143.7g、剥片26,145.2gである。石器総重量は95,906.9gであり、土器に迫る数量である。また剥片重量は剥片石器の約12倍である。

中期末～後期初頭主体の川原平（6）遺跡は、発掘調査報告書によると801,175gの土器・石器総重量のうち石器の総重量は553,964g（約69%）である。大型住居跡である第1号堅穴住居跡では土器30,251g、石器58,341gである（註2）。

筆者が石器の報告に関わった大川添（4）遺跡については、土器22箱に対して石器30箱であった。大川添（3）遺跡は、2011年度調査分で縄文土器11箱、石器39箱、2012年度調査分で平安時代のものを含む土器が43箱、石器126箱、2013年度調査分で平安時代のものを含む土器が15箱、石器39箱である。大川添（3）遺跡では箱数としても毎年度石器が土器の2～3倍以上出土していた。

以上、出土時点の段ボール箱数で土器よりも石器の量が多い遺跡がある。土器が多い遺跡においても、石器の種別内訳で見ると、珪質頁岩製の剥片総重量が剥片石器総重量に比べて10倍以上というのは不均衡に多いと思われる。

## （2）石器製作遺跡群としての認識

遺跡群最初の発掘調査である平成15年度調査の川原平（1）遺跡の調査報告書の中で、遺跡内で珪質頁岩製の剥片石器が盛んに製作された事が報告され、前述のように珪質頁岩製の剥片が97.6kgであり剥片石器の総重量3.1kgに比べて膨大な出土量であること、珪質頁岩の原石が数点出土したことが報告された（註3）。石匙は59点出土しており、うち6点（10%）はつまみ部のみ加工されており未完成品として報告されている。楔形石器は5点出土した。黒曜石では気泡を含み出来島産と考えられる剥片が52点、漆黒で深浦産と考えられる剥片が3点出土した。また、赤色顔料塊と赤色顔料付着の石皿・磨石がセットで写真紹介された。アスファルトの付着したものを含め石製円盤は16点出土した。川原平（1）遺跡の石器群の特徴が捉えられ、数量化された（岡本2006）。さらに搬入礫として水晶や男根状の奇石が報告されたのも重要である。

次の報告書となった水上（1）遺跡では、縄文時代後期後葉～晩期初頭と川原平（1）遺跡と同時期でありながら、石器群の様相が異なること、さらには遺跡の性格が異なる可能性が指摘された（岩田2008）。礫石器の出土量はほぼ同数なのに、剥片石器は川原平（1）遺跡が4倍ほど多い。水上（1）遺跡では川原平（1）遺跡と異なり石鏃、石匙などの定形石器の比率が低い。石匙においても、図示された4点のうち、つまみ部分のみ加工された簡易的なものが2点含まれていた。川原平（1）遺跡では削器などの不定形石器についても入念で製作時間がかかったものが作られているのとは対照的である。刃部角からカッティングやスクレイビングを行ったと推定される不定形石器や微細剥片が多い。黒曜

石が出土せず、石器にアスファルトの付着する事はほとんどない。石製品は全く出土せず、土製品は1点のみで、非実用的な道具がほとんど出土しない。なお珪質頁岩の原石や石核は出土している。川原平(1)遺跡の拠点的集落としての姿が明らかになっていくのは2011年以降であるが、水上(1)遺跡の報告により遺跡群の中でも、遺跡によって石器製作の様相が異なること明らかになった。両遺跡を対極として、各遺跡の石器製作の状況等を検討できる基盤ができた。

その後の報告では、それらの遺跡と直接対比等が行われることはなかったものの参考されていたと筆者は思う。定形石器の出土量が少ないとめか、石器製作については簡単な記述が多いものの、大川添(2)遺跡(482・515集)、水上(4)遺跡(500集)では、剥片の多さや珪質頁岩の入手に恵まれている石材環境が報告された。砂子瀬遺跡第35号土坑(482集)と水上(2)遺跡SI-1052(528集)で良好な石器接合資料、砂子瀬遺跡からは出来島産の黒曜石と石錐が多数出土した(513・543集)。

筆者は2010年に、芦沢(1)遺跡・砂子瀬遺跡・水上(2)遺跡を調査した。芦沢(1)遺跡では、土器が出土しないグリッドでも、珪質頁岩の剥片が確実に出土することに驚いた。さらに段丘礫として珪質頁岩の長さ15~20cmの原石が含まれていた。目の前の石器出土状況から石材産地の石器製作遺跡群と考えた。しかし、石材産地で自家消費分を超える数量の石器製作を行っているだけで、「石器製作遺跡群」といえるのかという疑問が残り、用語の定義についても整理が必要と感じた。産地側だけではなく、想定される搬出地の場所と石器の状況なども関わってくる。

その後、筆者は2013年には川原平(1)遺跡の南捨場を発掘調査した。石製円盤及び素材と考えられる相馬安山岩の板状礫が多数出土し、その製作が行われていると考えた。また、珪質頁岩で剥片集中地点があったほか、珪質頁岩の小ぶりな石核の硬質部分に敲打痕が形成されているものも出土した。石核転用敲石として報告したが、磨製石斧の製作に使用される敲石のように、多面体となっている。敲打面からの剥落が少ない点と敲打面の荒れが小さい点が類似している。そこで、多数出土している有縁石皿等の製作に用いられていることを想定した(齋藤2016)。剥片石器の製作残滓である石核が礫石器・石製品製作用のハンマーとして使用されて、一連となる石器・石製品の製作体系を作っていると考えた。筆者は、この年は大川添(4)遺跡の石器整理を担当した。黒曜石は早期の日計式に伴う深浦産の1点のみで、遺跡の主体となる中期末~後期初頭、後期後葉の時期の黒曜石は出土していない。アスファルト入りの後期前葉の土器がみつかったものの、アスファルト付着の石器は4点のみである。水上(1)遺跡と様相が似ているが、珪質頁岩の多数の石器接合資料が得られた(542集)。非拠点的な集落でありながら珪質頁岩の多数の石器製作が行われている第3の様相を持つ遺跡と感じた。岩木川の対岸に位置する大川添(3)遺跡は、その傾向がさらに顕著である(544集)。前述したように土器に対する石器の箱数の多さがあり、第303号竪穴住居跡と第305号住居跡の堆積土から石器素材となりうる多数の剥片と石核が出土した。前者からは赤色顔料も出土した。後者では欠損・未製品も出土したことから廃絶された竪穴住居跡の窪地を利用した石器製作の場であると報告されている(544集)。石器の中には、自家使用品のレベルを超えるような大型で入念に加工された搔器が出土している(図116-7・8)。整理箱の中には、接合できると確信させる石器が入っており、筆者はその一部を接合し、報告書で写真紹介した(齋藤2014a)。両遺跡で出土量の中で石器の占める割合が高いことから、「石器製作遺跡群」といいきれると感じて大川添(4)遺跡の報告書で、これまで積み重ねられてきた石材産地としての認識を記載した(齋藤2014b)。この段階では搬出先については明示できなかった。同年

に刊行された報告書では石器接合資料が各遺跡から紹介された。芦沢(2)遺跡の後期後葉の第6号堅穴住居跡では2点の剥片が接合した(540集)。鬼川辺(3)遺跡の中期中葉～後葉の第5号堅穴住居跡出土の2点の削器が接合した(541集)。砂子瀬遺跡の後期後葉のA区第116号堅穴住居跡の周溝内のピットから石器と素材剥片、未成品がまとまって出土し2点の削器が接合した(541集)。

その後、大川添(4)遺跡で報告した珪質頁岩に恵まれた石材環境は、川原平(1)遺跡(565集)、水上(2)遺跡(575集)でも引用された。石器の搬出には触れられず、穏当な記述がなされている。

### (3) 問題提起

筆者は水上(2)遺跡(514集)と川原平(1)遺跡を調査し、なぜ両遺跡からの遺物出土量が多いのかという問い合わせ持っていた。そのため珪質頁岩に恵まれた石材環境から、さらに踏み込んで搬出目的の石器・石製品製作を行ったためとする答を持った。西本豊弘らは川原平(1)遺跡の動物遺体を分析し、海産魚であるニシン、アホウドリの骨が含まれていること報告した。その意味について「遺跡の特産物であるベンガラ(赤鉄鉱)や漆製品」の対価として交換されたものと推定した(西本・齊藤2017)。筆者は、その見解に賛同するものであり、石器・石製品について石材環境に恵まれていない岩木山東麓や岩木川中流域へ搬出されていたという見通しを、問題提起として本稿で記す。それらの地域の発掘調査報告書で石器・石製品の記載が、充実することにより、さらに確かな物になると考える。

## 2 石器・石製品の石材分布

### (1) 硅質頁岩

遺跡群の周辺の表層地質図を図2で示す。特に重要なのは剥片石器の素材となる珪質頁岩である。津軽地方南西部には、珪質頁岩の大童子層が分布している。早くから石器製作遺跡として注目されたのは鰯ヶ沢町前森遺跡である。中村川右岸に位置する縄文時代後期の遺跡であるが、対岸は大童子層の縁辺部を流れる沢と中村川との合流地点である(図3; 註4)。珪質頁岩の石屑が多量に出土しながら製品が少ないため、石器製造所として報告された(村越1968)。筆者は石材分布の中心部よりも、縁辺で沢の下方の方が、原石の選別を含めて採取に利便性があると考えている。大川添(3)遺跡は、珪質頁岩の大童子層が分布する岩木川左岸に位置し、甲沢が大童子層を流れ抜けた下流に位置する。岩木川のさらに上層にも大童子層は分布しているが、甲沢からも珪質頁岩が入手できるという利点があったため珪質頁岩製の石器製作が集中的に行われたと考えている。

### (2) 相馬安山岩

相馬安山岩については水上(2)遺跡の石棺墓の構成礫となっている。相馬安山岩類が岩木川をはさんだ対岸に分布していることは、地質図等に明記されている(根本2003、島口2017)。水上(2)遺跡の報告書では対岸での産出記録を記載しているが、実際に踏査できた場所として、6km下流の西目屋村長面をあげている(575集第1分冊16頁)。それをもとに総括編では、相馬安山岩については「遺跡周辺にもほとんど確認できない」(575集第6分冊128頁)と記された。岩木川右岸と左岸を結ぶ橋は、ダム工事の進展により、取り壊されていった。川原平(1)遺跡でも相馬安山岩製の石皿や石製円盤が出土している。そのため筆者が踏査を思い立った頃には橋が無くなっていた。しかし、津軽ダムの管理のうえでも、岩木川左岸への道路が存在すると考えたことから2018年の5～6月に計2回、西目屋村藤川からの林道藤川線を上流側に向かい踏査した。その結果、写真2のとおり、露頭を確認した。

板状節理のデイサイト質で石英を含み、肉眼的に類似している。地質図での記載が再確認できたと考えると、板状の礫（石器素材）の獲得しやすい場所に遺跡群が位置していると考えられる。

#### (3) 安山岩・(緑色)凝灰岩・花崗岩類

礫石器の素材となった緑色凝灰岩や凝灰岩・砂質シルト岩の起源は砂子瀬層、緑色の安山岩は藤倉川層と考えられる（柴2016・島口2018）。また、水上(2)遺跡の報告書では、岩木川の本支流での礫石器の石材の産出状況が報告された（575集第1分冊16頁）。中期後半からの有縁石皿が増加し、晩期には中高の石皿も出現するため、軟質の（緑色）凝灰岩が近くで採取できることは、礫石器産地として恵まれている。シルト岩は石製円盤の素材としても利用されている。また、花崗岩類については、大沢川上流に大沢岩体（柴2001）が分布している。大沢岩体は中粒のホルンブレンド黒雲母花崗閃緑岩～閃緑岩からなるとされる。水上(2)遺跡では、花崗閃緑岩製の石冠が出土している（575集3-図327-1）。研磨は十分ではなく、搬入品とは考えにくい。大沢岩体を起源とした花崗閃緑岩から遺跡内で石冠製作が行われたものと考えたい。以上のように、通常の礫石器石材は、これらで十分まかなえる。柱状節理の流紋岩があれば、石棒製作に役立つものの、凝灰岩や他の岩石でも製作可能である。水上(2)遺跡では、中期に大型の石棒が好まれた時代性があるためか、柱状節理の流紋岩を素材とした石棒が出土している。SI11091から出土している未加工の素材と思われるものは、長さ58cm、重量7816.5gの大型品である（575集2-図149-9）。水上(2)遺跡周辺の流紋岩としては、最も近いのは約13km東に分布する弘前市南部の久渡寺流紋岩である。久渡寺流紋岩は久渡寺山から西の棺森付近に分布し柱状節理となったものは棚内川などでも採取できる（齋藤2013）。写真3のとおり肉眼的にも類似している。遺跡群からは採取可能な距離であり、準地元石材として考えておきたい。

#### (4) スレート・砂岩・チャート・水晶・石英・鉱物等

スレート・砂岩・チャートを産する朝日股・西股沢基盤堆積岩類が大沢川上流に、湯ノ沢川上流には湯ノ沢川基盤堆積岩類が分布する（根本2004）。川原平(1)遺跡では、これらに相当すると考えられるものでは、砂岩が石製円盤の素材となっている（579集写真241-41、249-14・51）。

遺跡群の南に位置する尾太鉱山の本坑や各鉱床は熱水により生成したもので、鉱石には水晶や石英が伴う。川原平(1)遺跡では、尾太鉱山産の水晶に多い針状のもの（579集写真201-5・9・10）などが出土している。また、石製円盤に黄鉄鉱石が使用される例があり、方鉛鉱が出土している。マンガンノジュールと、それを穿孔して石製品としたものもある（齋藤2017:114頁）。珪化木も出土している（579集写真201-12～15・17など）。

#### (5) 赤色顔料

赤色顔料の原料となる赤鉄鉱で鉻染された泥岩は、大童子層及び赤石層の泥岩と推定された（柴2016；註5）。赤鉄鉱で鉻染された泥岩として有名な今別町赤根沢の露頭が中期中新世後期から後期中新世前期の小泊層に由来するが、それと同時代で同様な岩相を示すという。遺跡群の中では、時代差があり、晩期に集中的に利用されている。水上(2)遺跡では赤色顔料付着の礫石器は中期後葉以降の2点のみである（575集第6分冊179頁）。川原平(1)遺跡第12号建物跡からは、中期末の内部に赤漆が厚く付着した小形土器が1点見つかっている（565集）。川原平(6)遺跡からは中期末から後期前葉の小形土器等からパイプ状ベンガラが検出されている（567集）。ほぼ同時期の弘前市沢部(2)遺跡でも、類似した出土品があるため中期末の時期的な特徴かもしれない。大川添(3)遺跡からは中期末

～後期初頭の鳥形異形土器が出土しており、粉状の赤色顔料が出土した。しかし、後期の砂子瀬遺跡の2009・2010年調査範囲においては「赤色顔料原礫の可能性がある赤鉄鉱も少量出土している。（中略）赤色顔料の加工に関わる石器は出土しておらず、赤鉄鉱が搬入されたものか地山に含まれる物かは、今後検討すべき課題である」としている（513集172頁）。中期末頃を中心に赤色顔料を用いた漆製品の製作を示唆する資料が見られるものの、晚期から多数使用されるのとは対照的である。川原平（1）・（4）遺跡では多数の赤色顔料塊が出土し、赤色顔料の付着した磨石と石皿も多い。川原平（4）遺跡では14基の土坑墓に赤色顔料が散布されていた（566集）。川原平（1）遺跡では、ウルシの内果皮、3点の漆漉し布、そして非常に多数の漆製品が出土している（580集）。漆液容器や赤色顔料の精製・保管に用いられた土器も出土した（中澤2017）。なお分析された赤色顔料のなかには、遺跡群周辺では産しない水銀朱が含まれていた例が複数あった（580集第1分冊）。

### 3 想定される搬出先と搬出形状

具体的な搬出地域と搬出遺跡について図3に地質図とともに記載する。

岩木山が安山岩からなるため、岩木山麓は基本的には安山岩以外の石材は搬入品と考えられる。岩木川周辺でも川原の広い扇状地を抜けた後の中流域では、川幅が狭まり水量が増すため石材採取の条件が悪くなる。石製円盤は岩木川河口に近い五所川原市市浦の五月女瀬遺跡で2点の出土である。弘前市内では岩木山麓に位置する大森勝山遺跡で250点以上、十腰内（1）遺跡は計164点出土し、薬師遺跡での図示点数は67点である。岩木川中流域の弘前市野脇遺跡では23点の出土であり、弘前市内でも岩木山東麓に多いという地域性がある。川原平（1）遺跡では、石製円盤では最初の報告（409集）からの累計で6,933点以上となる。周辺遺跡から見て突出した数量であり、日本最多と考えられる。他への搬出を前提とした製作を想定しないと説明できない。花崗岩類は産地が限られるため、岩木山麓の弘前市大森勝山遺跡・十腰内（1）遺跡の花崗岩・閃緑岩製の石製円盤は川原平（1）遺跡からの搬出品と筆者は考えた。また、岩木川中流域の弘前市野脇遺跡の中高石皿と板柳町土井（1）遺跡のマンガンノジョールの可能性の高い石製品についても同様に考えた（齋藤2017）。この地域の遺跡で出土した珪質頁岩製の石器も、筆者は主な搬入元を川原平（1）遺跡と考える。これらの遺跡を図3に示したが、いずれも、珪質頁岩を産する大童子層・大和沢層から距離がある。岩木川扇状地域までいけば、上流の津軽ダム関連遺跡群付近で採取できる石材の獲得は可能である。しかし、岩木川の数多い支流から安山岩や凝灰岩が入ってくるため、花崗岩類や珪質頁岩の河川礫に占める割合は低下していく。筆者の珪質頁岩産地の河川での石材採取（齋藤2002）の経験からいければ、礫の外観は良くても、割ってみると思いのほか軟質な事があった。珪化は十分でも石の目が多く入るものや、小形で両極打法でしか剥片がとれないものが多い。珪質頁岩の採取効率がよいのは、珪質頁岩層の分布域に近接する沢の下流側である。大きさと石質がともに良い石を拾えることは、特に条件の良い場所（北海道木古内町大釜谷川；立田2014）を除くと少なかった。

そういう事を考え合わせると、他地域への搬出形状としては、原石そのものよりは、石質を見るための試し割りがなされた通称「一発コア」のほうがよい。さらに良いのは、原石の中での最良の硬い部位である中心部分を残して製作された両面調整石器である。石核として打面では剥離しやすい角度も確保されており石鏃等の素材となる（大場2006）。中心部分は、石槍や石籠に加工できる。青森県

内から北海道南部では前期中葉から中期にかけて、盛行する（齋藤 2018a）。水上 (2) 遺跡から 1,096 点出土している（一方、野脇遺跡から西に 1.5km 離れた前期末～中期主体の弘前市独狐七面山遺跡は土偶が 15 点出土した遺跡であるが剥片石器では石鏃 89 点、石槍 4 点、石籠 4 点、搔器 7 点、異形石器 3 点、石核 2 点であり、両面調整石器は出土していない；弘前市教育委員会 2001）。また、剥片という形も、使用者が自分の求める刃部形状に加工できるため、製品とともに一定数搬出されたと考える。製品では、調査の初期から留意されてきた前述のつまみ部のみを加工した石匙が遺跡群からは多数出土している。筆者の整理した縄文時代の遺跡では 50 ～ 200 点に 1 点くらいは含まれるという認識であった。遺跡群では明らかに多く 2 割程度は出土していると感じている。この形状であれば、そのまで対象物のカッティングが可能であり、搬出先で使用者が求める刃部形状に加工する事ができる。さらに、製作時に欠損する可能性のある、つまみ部は作り出されているので搬出形状として優れている。

珪質頁岩の採取地点としては、図 3 の中でも弘前市沢部 (2) 遺跡に近接し、珪質頁岩である大和沢層を流れる稻刈沢川（齋藤 2018b）も候補となる。岩木川中流部の遺跡では、土井 (1) 遺跡から朱漆塗土器や赤色顔料を使用した腕輪・櫛・籠胎漆器、赤色顔料入りの有縁石皿が出土していることから、漆製品が多数製作されている川原平 (1) 遺跡の可能性がより高いと考える（註 6）。また、報告書掲載の白黒写真からの推定ではあるが、野脇遺跡の安山岩製の石製円盤の中に相馬安山岩製の可能性のある物も含まれている。

さらに野脇遺跡の珪質頁岩製の石器には、川原平 (1) 遺跡等で多数使用されている礫皮付近が灰白色の凝灰岩質で礫中心部が灰褐色～黒褐色の珪質頁岩となる石材も出土している。これを本稿では石質グループ 1 とする。礫皮がなく、中心部の物だけ利用した小型石器（石鏃等）についても、高い可能性で相当すると考えられる物がある。大川添 (4) 遺跡や水上 (2) 遺跡など遺跡群で多数出土しているほか、弘前市薬師遺跡でも出土している（写真 4）。稻刈沢川では、まだ 2 回しか踏査していないためか未発見である。八戸市潟野遺跡の報告（佐々木 2007）のような石質類型資料別を目指したいが、その前段階として、肉眼的に類似した石質からグループに分けていく方が現実的である。産地遺跡では石の珪化の状況をはじめとして変化が大きい。石の色・狹雑物・石の目・光沢などを正確に記載していくのは、現状では困難である。しかし、北海道木古内町の大釜谷川で、珪質頁岩の特徴を分類・記載し、近接遺跡の出土品と対比した例（立田 2008）がある。距離がある遺跡を結び付けるには、状況証拠（石材分布と石の顔つき）だけでは、他の可能性も入り込むため根拠としては弱い。遺跡が近い例としてグループ 2 を写真 5 に示す。礫皮と礫内部の石の色など肉眼的特徴があり、石器表面が鉄分由来の褐色がかった色が付着する。川原平 (1) 遺跡の石核と大川添 (3) 遺跡の石器接合資料を代表させて示した。逆に川原平 (1) 遺跡へ搬入された可能性のある石材としてグループ 3 を写真 6 に示す。沢部 (2) 遺跡で淡緑色の珪質頁岩として巻頭カラー写真で紹介したものと肉眼的に類似している（註 7）。沢部 (2) 遺跡では石核や剥片が多数出土しており、原石を近接する大和沢川にそった道路脇で採取したことがある。現在は、グループ 3 に関する原石の採取可能範囲も未調査である。遺跡群により近い場所にも分布する可能性もある。淡緑色の珪質頁岩は全国各地で出土すると思われるが産地ごとに特徴があると感じられる（註 8）。肉眼で識別できる特徴をもっているものの、従来、着目されてこなかったため、既刊の発掘調査報告書からこの石材を抽出することも困難である。本稿で、まずは、

名前をつけるところから始めたい。弘前市付近の遺跡を今後発掘調査する時に、識別しやすいグループ1・3の出土形態や数量、石器製作の有無に留意して報告されていけば、近～中距離の珪質頁岩の動きが明らかになると考へる（註9）。

そのことにより、珪質頁岩については広く産出層のある日本海側から良質な物が得られない太平洋側へといった遠距離間移動だけではなく、より細かな石材流通論が構築できる可能性がある。

### おわりに

最後に、縄文晩期の時代性から川原平(1)遺跡の特質を考えてみたい。これまで、西本らの推定に基づき赤色顔料の産地に位置する漆製品の製作拠点として、珪質頁岩製の石器と石製円盤の製作・搬出拠点として述べてきた。次に、搬出を目的としない石製品の製作について述べる。独鈷石については砂岩を素材とした未成品が川原平(4)遺跡から出土しているものの、出土点数は川原平(1)遺跡でも少ない。緑色凝灰岩製の玉に関しても、表面を磨いた玉素材が出土している。玉素材は岩木川上流でも採取可能であり、製作が行われていたと考えられる。土坑墓からの出土品ともなっている。しかし、つがる市木造亀ヶ岡遺跡や五所川原市市浦の五月女苑遺跡、外ヶ浜町三厩宇鉄遺跡のように、専用の玉髓製の石錐を用いて大量に生産される事はなかった。様々な資源に恵まれていても、より付加価値の高いものに労力を集中させていたと考えたい。縄文時代晩期は、資源開発と特產品化がなされた時代性があると筆者は考える。海岸部では、青森県外ヶ浜町平館の今津遺跡のように専用の製塩土器が出現する。赤色顔料として水銀朱が広く使用されるようになる。盛岡市域では川目A遺跡や手代森遺跡で蛇紋岩製の磨製石斧が集中的に生産されるようになる。川原平(1)遺跡では、北陸系の「蛇紋岩」（透閃石岩）製磨製石斧の出土が注目されたが、川目A遺跡や手代森遺跡の蛇紋岩製磨製石斧と類似したものが出土している（註10）岩手県雨滝遺跡・二子貝塚、宮城県田柄貝塚など地元石材で磨製石斧が製作される（齋藤2011）のも晩期である。群馬県内では千網谷戸遺跡などで精巧な土製耳飾りが製作される。

### 謝辞

本稿を作成するにあたり、過去の資料調査の際を含め、ご教示・ご協力を賜った皆様に厚く御礼申し上げます。特に青森県立郷土館の岡本洋氏、青森県教育庁文化財保護課の館山友香理氏にお世話になりました。感謝いたします。

### 註釈

（註1）川原平(1)遺跡では、西捨場出土の紫水晶に類似した物が探し出せない旨記述したが（580集第二分冊114頁）、岩手県北上市卯根倉鉱山、新潟県阿賀市保田産などの存在を知った（写真1）。尾太鉱山の产出のものを1点見たことがあるが、黄鐵鉱・黄銅鉱と共に共生し、水晶の表面にもそれらの小さな結晶が付着していた。青森・秋田両県には水晶・石英を伴う熱水鉱床があり、より近い場所にも存在する可能性がある。ヒスイと同様に稀少で美しいものとして搬入された可能性があり、今後も注視していきたい。

（註2）縄文時代中期～後期初頭主体の川原平(6)遺跡では、土器の総重量より石器の総重量が多いことには、時代性も考えられる。円筒土器文化の時代には多数の厚手の土器が製作される。縄文時代晩期には、精製土器と粗製土器があるうえ、器形の種類が多い。それらの時期には土器の重量が相対的に増加すると思われる。縄文時代中期～後

期初頭は、土器は薄手で深鉢形土器が基本であり器形の変化は少ない。剥片石器のサイズは円筒土器文化のものに比べると小型化するが、この地域で採取できる原石の大きさに変化は無い。各時期ともに原石の選択においては、珪化の状況や石の目がない事など質が優先されると考えられる。筆者は石器製品の大きさは小型化しても剥片を含めた数量の変化は小さいと考える。

(註3) 川原平(1)遺跡では、5cmを超える大形石鎌(579集写真117-12など)が出土している。両面加工の石器の場合、石器の成形までに調整剥片が多数発生し、器体は小さくなっていく。大きな素材の獲得が容易な石材産地でこそ製作可能な大きさである。

(註4) 図2は表層地質図であり、赤石層が広がっているが、図3では、その下位にある大童子層が図示されている。砂子瀬層の下位には藤倉川層がある。上位の層厚が薄い部分では、白神山地を刻む沢により下位の層の岩石も得られるため、岩木川では多様な岩石が採取できる。

(註5) 岡本洋氏の教示によると、弘前市相馬地区は赤色の「錦石」の産地として知られ、鉄石英や赤色顔料塊が产出することである。相馬地区には図3のように珪質頁岩層である大和沢層が分布している事と調和している。

(註6) 岩木山南東麓の小森山東部遺跡からは、「アスファルトを用いて小穴に土器破片を粘着した石器時代晚期の壺形土器」が発見されている。昭和30年代の岩城山麓の遺跡群調査の際には、朱塗り壺や朱塗り精製注口土器、土偶、動物の顔が付いた土器破片(土製品)が出土した。「粗製実用品はともかくとして、精製品や特殊品はおそらく外部からもたらされたのでなかろうか。」(今井1968)と記された。石器については石鎌、石錐、石匙、黒曜石の小破片などが出土しているが、搬入品である。報告から50年の年月を経て、搬入元についての最有力候補が川原平(1)遺跡と指摘できると私は考える。岩木山東麓の拠点的な集落である薬師遺跡を経由している可能性があるものの、川原平(1)遺跡は珪質頁岩と赤色顔料の産地で漆製品の製作地である。アスファルト関係品や土偶の多量出土遺跡で、動物・人面付き土器・土製品が作られているためである。

(註7) 石質グループ3とした淡緑色の珪質頁岩製石鎌(578集写真122-8)と同質の石材が約20km離れた弘前市沢部(2)遺跡から大量に出土している事は、当時、同遺跡を調査していた青森県文化財保護課の館山友香理氏の教示で知った。その後、筆者が同遺跡の石器整理の主担当となり、稲刈沢川などでの石材採取を開始する事につながった。

(註8) カラー写真で報告され、筆者が実見したものでは、押出遺跡第6次調査の報告書写真図版56-267、60-316などがある。それらはグループ3とした石材と異なる特徴をもつ。

(註9) 岩木山東麓の弘前市薬師遺跡では、石器の丁寧な報告がなされ、石材別の重量比が示されている。珪質頁岩が180,837.0gで剥片石器石材として最も多く、チャートが1,715.5g出土している。チャートは弘前市南部の先第三期の付加体堆積物に産する。珪質頁岩を産する稲刈沢上流の弘前市座頭石地区に露頭がある。そのため、珪質頁岩のすべてが遺跡群由来とは考えられない。また、水晶353.4gと石英126.9gは西目屋村の尾太鉱山周辺から予想される。また、珪化木735.3g、緑色凝灰岩1,697.6g、花崗岩1,174.6g、花崗閃綠岩16,741.0g、緑色凝灰岩1,697.6g、凝灰岩10,308.2gは、岩木川で採取可能であるが、採取効率からいけば上流部の津軽ダム関連遺跡群から直接もたらされたものを含むと考えたい。凹石に多用されている不整形の安山岩は、岩木山由来の物と思われるが、「礫石器は大半が安山岩・ディサイト・凝灰岩・花崗閃綠岩の扁平楕円礫で製作されている」と記述されている(第二分冊141頁)。678,801.9gの安山岩の中には、藤倉川層由来の岩木川系の緑色の安山岩の扁平楕円礫を素材としたものが含まれていると思われる。これを礫石器石質グループ1とするなど、今後の報告書で岩木山由来の安山岩と区別していくと、石材について認識が深まると思われる。珪質頁岩の見た目の特徴(写真4)と石材の偏在(図3)、道のつながり(図1)を述べるだけでは状況証拠としても弱い。筆者は円筒下層 $\alpha$ 式期に青森市三内丸山遺跡で多用される石材と同時期の青森市大矢沢野田(1)遺跡の石材が類似していると述べたことがある。しかしカラー写真のみ示し、石の顔つきが似ているとしたものであった。産出地点を示すことができなかった。(齋藤2002)。礫石器・石製品の共通要素について、積み重ね、重ね合わせていくことが、状況証拠を高める上で有用である。

(註10) 川原平(1)遺跡の蛇紋岩製磨製石斧について触れておきたい。たとえば西捨場(第579集)写真161-19・32写真162-2・7・14・23・26などは、石材名称としては異なるものの、筆者には資料調査で観察した盛岡市手代森・川目A遺跡で蛇紋岩製磨製石斧とされていたものと肉眼的には同じにみえる。

## 引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1992『青森県遺跡詳細分布調査報告書IV』青森県埋蔵文化財調査報告書第146集
- 青森県教育委員会 1993『野脇遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第149集
- 青森県教育委員会 1999『十腰内(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第261集
- 青森県教育委員会 2001『十腰内(1)遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第304集
- 青森県教育委員会 2004『朝日山(2)遺跡IX』青森県埋蔵文化財調査報告書第369集
- 青森県教育委員会 2006『川原平(1)・(4)遺跡・大川添(2)遺跡・水上遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第409集
- 青森県教育委員会 2008『水上遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第452集
- 青森県教育委員会 2009『砂子瀬遺跡・水上(3)遺跡・水上(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第466集
- 青森県教育委員会 2010『砂子瀬遺跡II・大川添(2)遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第482集
- 青森県教育委員会 2011『大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡II・芦沢(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第500集
- 青森県教育委員会 2011『青森県遺跡詳細分布調査報告書23』青森県埋蔵文化財調査報告書第510集  
(川原平(2)・(3)遺跡範囲確認調査)
- 青森県教育委員会 2012『砂子瀬遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書第513集
- 青森県教育委員会 2012『水上(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第514集
- 青森県教育委員会 2012『大川添(2)遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書第515集
- 青森県教育委員会 2012『青森県遺跡詳細分布調査報告書24』青森県埋蔵文化財調査報告書第523集  
(川原平(5)遺跡隣接地範囲確認調査)
- 青森県教育委員会 2013『川原平(4)遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第527集
- 青森県教育委員会 2013『水上(2)遺跡II・水上(3)遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第528集
- 青森県教育委員会 2014『川原平(4)遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書第539集
- 青森県教育委員会 2014『芦沢(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第540集
- 青森県教育委員会 2014『鬼川辺(1)遺跡・鬼川辺(2)遺跡・鬼川辺(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第541集
- 青森県教育委員会 2014『大川添(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第542集
- 青森県教育委員会 2014『砂子瀬遺跡IV』青森県埋蔵文化財調査報告書第543集
- 青森県教育委員会 2014『大川添(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第544集
- 青森県教育委員会 2014『上新岡館・薬師遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第545集
- 青森県教育委員会 2015『青森県詳細分布調査報告書27』青森県埋蔵文化財調査報告書第560集  
(西目屋村川原平(1)・(4)遺跡隣接地)
- 青森県教育委員会 2016『川原平(1)遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第564集
- 青森県教育委員会 2016『川原平(1)遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書第565集
- 青森県教育委員会 2016『川原平(4)遺跡IV』青森県埋蔵文化財調査報告書第566集
- 青森県教育委員会 2016『川原平(6)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第567集
- 青森県教育委員会 2017『水上(2)遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書第575集
- 青森県教育委員会 2017『川原平(1)遺跡IV』青森県埋蔵文化財調査報告書第576集
- 青森県教育委員会 2017『川原平(1)遺跡V』青森県埋蔵文化財調査報告書第577集
- 青森県教育委員会 2017『川原平(1)遺跡VI』青森県埋蔵文化財調査報告書第578集
- 青森県教育委員会 2017『川原平(1)遺跡VII』青森県埋蔵文化財調査報告書第579集
- 青森県教育委員会 2017『川原平(1)遺跡VIII』青森県埋蔵文化財調査報告書第580集
- 青森県教育委員会 2018『沢部(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第594集
- 青森県教育委員会 2018『三内丸山遺跡44 第二分冊』青森県埋蔵文化財調査報告書第588集
- 青森県農林水産部農村整備課 2005『土地分類基本調査 中浜・田代岳』
- 青森県立郷土館 1984『亀ヶ岡石器時代遺跡』青森県立郷土館調査報告第17集・考古-6
- 青森県立郷土館 2018『平成30年度企画展 新説!白神のいにしえ—津軽ダム建設に伴う発掘調査成果とともに—』

展示図録

- 板柳町教育委員会 1993『土井 I 号遺跡』
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986『手代森遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 108 集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2012『川目 A 遺跡第 5 次調査発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 589 集
- (公財) 山形県埋蔵文化財センター 2017『押出遺跡第 6 次調査報告書』山形県埋蔵文化財センター報告書第 227 集
- 五所川原市教育委員会 2017『五月女泡遺跡発掘調査報告書』
- 御所野縄文博物館 2017『えっ！縄文時代にアスファルト？－縄文の生産と流通～東北日本のアスファルト－』展図録
- 階上町教育委員会 2007『寺下遺跡発掘調査報告書』
- 弘前市教育委員会 2001『狹孤七面山遺跡発掘調査報告書』
- 弘前市教育委員会 2010『大森勝山遺跡発掘調査報告書』
- 弘前大学人文学部日本考古学研究室 2005『青森県東津軽郡平館村今津遺跡発掘調査報告書－津軽半島東沿岸部における亀ヶ岡文化の遺跡－』
- 阿部朝衛 1984「多面体を呈する敲石について」『豊栄市史研究』第 2 号
- 岩田安之 2008「石器からみた水上遺跡の用途」『水上遺跡 II』青森県埋蔵文化財調査報告書第 452 集
- 大場正善 2006「日向洞窟遺跡西地区における石器製作のテクニック」『山形県東置賜郡高畠町 日向洞窟遺跡西地区出土石器群の研究 I—縄文時代草創期の槍先形尖頭器を中心とする石器製作址の様相—』東北学院大学歴史学科佐川ゼミナール
- 岡本洋 2006「石器」『川原平(1)・(4) 遺跡・大川添(2) 遺跡・水上遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 409 集
- 奥山 潤 1954「縄文晚期の組石棺—秋田県北秋田郡早口町矢石館遺蹟—」『考古学雑誌』第 40 卷第 2 号 日本考古学会
- 長田友也 2018「縄文時代晩期の中部日本における社会動態の可能性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 208 集
- 児玉大成 2005「亀ヶ岡文化を中心としたベンガラ生産の復元」『日本考古学』20
- 鎌田耕太郎 2001「山地と丘陵の生い立ち」『新編弘前市史 通史編 1(自然・原始)』
- 齋藤 岳 2002「青森県における石器石材の研究について」『青森県考古学会 30 周年記念論集』
- 齋藤 岳 2002「石器」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』
- 齋藤 岳 2003「蛇紋岩製磨製石斧の製作と流通—渡島半島と本州北端の間で—」『北海道考古学』第 39 輯
- 齋藤 岳 2011「石器について」『道仏鹿糠遺跡・藤沢(2) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 499 集
- 齋藤 岳 2013「弘前市大森勝山遺跡の環状列石構成礫について」『青森県考古学』第 21 号
- 齋藤 岳 2014b「石材产地としての認識」『大川添(4) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 542 集
- 齋藤 岳 2014a「石器製作関係資料について」『大川添(3) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 54 集
- 齋藤 岳 2016「北日本の緑色擦切磨製石斧の石材名と製作技法・流通について」『青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要』第 21 号
- 齋藤 岳 2016「東北地方を中心とした縄文時代石斧研究の現状について」『青森県考古学』第 24 号
- 齋藤 岳 2017「石器・石製品」『川原平(1) 遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 580 集
- 齋藤 岳 2018a「石器」『三内丸山遺跡 44 第二分冊』青森県埋蔵文化財調査報告書第 588 集
- 齋藤 岳 2018b「石材環境」『沢部(2) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 594 集
- 齋藤 岳・島口 天・長井雅史・金成太郎・杉原重夫 2010「弘前市中村川支流の孫産童子沢に分布する黒曜石の全岩化学組成」『青森県立郷土館研究紀要』第 34 号 青森県立郷土館
- 佐々木雅裕 2007「石質類型資料別の石器組成と剥片生産の様相」『湯野遺跡 II』青森県埋蔵文化財調査報告書第 431 集
- 佐々木嘉直 1998「岩手県内出土の石製円盤・土製品について」『紀要Ⅷ』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 柴 正敏 2001「最古の地層群(先第三系)」『青森県史 自然編 地学』青森県
- 柴 正敏・諸星哲也 2015「青森県埋蔵文化財調査センターにおける石材標本作成の意義」『青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要』第 20 号

- 柴 正敏 2016「遺跡周辺の地形及び地質について」『川原平(4) 遺跡IV』青森県埋蔵文化財調査報告書第566集
- 島口 天 2006「遺跡周辺の地形・地質」『川原平(1)・(4) 遺跡・大川添(2) 遺跡・水上遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第409集
- 島口 天 2013「川原平(4) 遺跡A区の地形・地質」『川原平(4) 遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第527集
- 島口 天 2018「しらかみの地質」『平成30年度企画展 新説!白神のいにしえ—津軽ダム建設に伴う発掘調査成果とともに—』展示図録 青森県立郷土館
- 鈴木克彦 2008「十腰内I 遺跡の青玉攻玉と壺に収納された青玉の流通」『青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要』第13号
- 須原 拓 2013「川目A遺跡出土の磨製石斧にみる石斧生産について」『紀要』XXXII 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 杉野森淳子 2017「アスファルト関連資料集成 青森県」『縄文時代のアスファルト利用 I』特定非営利活動法人いちらへ文化・芸術NPO
- 高橋 哲 2016「磨製石斧の生産と流通」『一般社団法人日本考古学協会2016 年度弘前大会 第1分科会 津軽海峡圏の縄文文化研究報告資料集』日本考古学協会2016 年度弘前大会実行委員会
- 立田理 2014「石器石材について」『木古内町釜谷8 遺跡』(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第305集
- 中澤寛将 2017「漆工関連遺物・赤色顔料製造関連遺物」『川原平(1) 遺跡VII第二分冊』青森県埋蔵文化財調査報告書第580集
- 秦 昭繁 2003「東北地方の珪質頁岩石材環境」『考古学ジャーナル』499
- 西本豊弘・齊藤慶吏 2017「動物遺体の同定」『川原平(1) 遺跡VII第一分冊』青森県埋蔵文化財調査報告書第580集
- 根本直樹・鎌田耕太郎 2003「表層地質図」『土地分類基本調査 川原平』青森県農林水産部農村整備課

表1 津軽ダム開運遭跡群の概要

24	大川添(3)遺跡	544	5/8~11/20	7,200	縄文時代の堅穴住居跡7、土坑6、土器底盤遺跡2、焼土遺跡3、配石遺跡15、平安時代の堅穴住居跡2。
24	大川添(4)遺跡	542	5/8~11/20	5,800	縄文時代中期の土器。平安時代の土器。赤の形土製品をふたに用いた赤色調料入りの土器。
25	水上(2)遺跡	575	5/9~11/15	12,000	縄文時代後期の堅穴住居跡11、堆立柱建物跡2、土坑162、土器底盤遺跡5、清灰道跡3、焼土遺跡1、ビット33、石製品2、土製品1。
25	川原平(2)遺跡	564・565・576・577	5/7~11/14	3,400	縄文時代中期と後期の堅穴住居跡17、土坑51、柱穴120、配石遺跡19(石枕蓋3)、土器底盤遺跡38、焼土遺跡17、捨て場2、焼土遺跡1。
25	川原平(1)遺跡	566	5/7~9/6	6,000	縄文時代中期と後期の堅穴住居跡1、土坑18(土坑蓋)、土器底盤遺跡2。
25	川原平(4)遺跡	567	5/7~6/28	3,200	縄文時代中期と後期の土器・石器。
25	川原平(6)遺跡	543	5/7~6/28	1,100	縄文時代前期末葉～中期後葉の堅穴住居跡7、土坑7、配石遺跡8、平安時代の堅穴住居跡2。
26	水上(2)遺跡	575	7/1~11/14	4,500	縄文時代中期の土器・石器。平安時代の堅穴住居跡33、土坑22、焼土遺跡9、土器底盤遺跡4、配石遺跡9、石枕蓋8、ビット139。
26	川原平(1)遺跡	576~579	5/1~11/14	4,500	縄文時代後期末～後期の土器・石器。平安時代の堅穴住居跡3、土坑256、配石遺跡8。
26	川原平(4)遺跡	566	5/1~11/14	14,500	縄文時代中期中葉～後葉の堅穴住居跡19、土坑269(土坑蓋34)、土器底盤遺跡8、焼土遺跡10、ビット670、捨て場1。
26	川原平(6)遺跡	567	5/1~7/11	5,600	縄文時代中期と後期の堅穴住居跡22、土坑16、柱穴173。
27	川原平(1)遺跡	576・579	4/20~8/28	4,000	縄文時代後期末葉～後期の堅穴住居跡1、捨て場2、焼土遺跡2、土坑8、柱穴546、配石遺跡1、焼土遺跡5。
計				248,636 m <sup>2</sup> (複数年にわたり調査を行った遺跡は、一部重複面積、計測面積を含まない)	16137 箱

平成28・29年度報告書で重複分整理



写真1 紫水晶（左；川原平(1)遺跡西捨場、中央；岩手県北上市卯根倉鉱山、右；新潟県阿賀市保田）



写真2 西目屋村砂子瀬対岸の相馬安山岩（左；露頭、右；板状節理の石）



図1 遺跡群の位置（秋田へ津軽平野から最短ルート）Google 社の Google Earth を加工

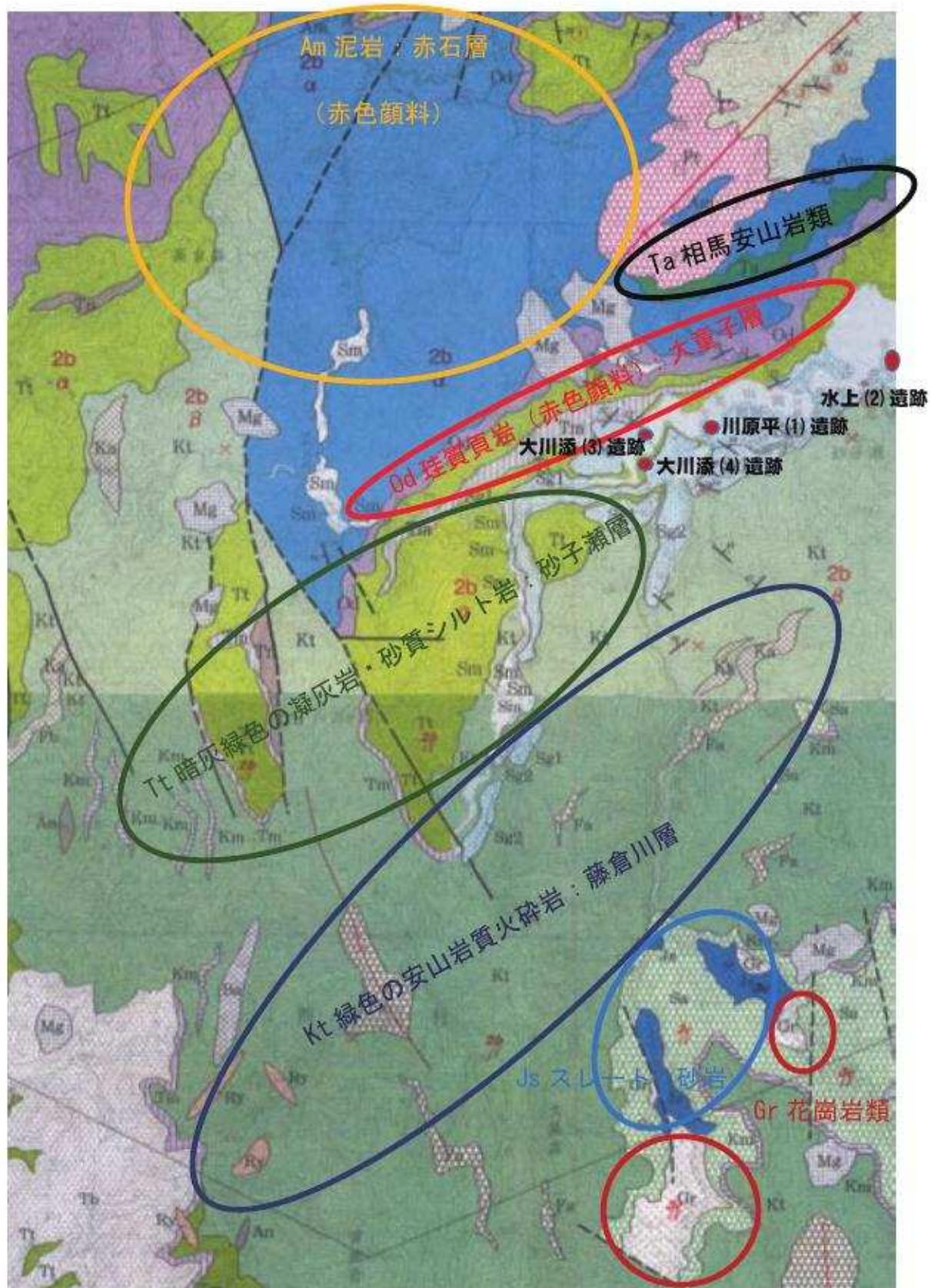


図2 表層地質図と関連遺跡（土地分類基本調査『川原平』・『中浜・田代岳』を加工）  
遺跡群の周辺に珪質頁岩・凝灰岩・安山岩・花崗岩類・赤色顔料素材等が分布



図3 青森県南西部の地質と縄文晩期等の関係遺跡(青森県の地質の付図を加工)



写真3 左: 久渡寺流紋岩露頭 中央: 弘前市棚内川の礫 右: 水上(2)遺跡の流紋岩製石棒



写真4-1 石材グループ1 左: 川原平(1)遺跡 (579集写真 160-2・117-37・121-25)右: 大川添(4)遺跡 SI113・16



写真4-2 石材グループ1 水上(2)遺跡 左 SI1052、右 SI3103(528集) 弘前市薬師遺跡 弘前市野脇遺跡



写真5 石材グループ2 左: 川原平(1)遺跡 (579集写真 155-16) 右: 大川添(3)遺跡 (579集 225頁 2・5図)



写真6 石材グループ3 左: 川原平(1)遺跡(本書27頁図 1-1)中央左: 弘前市沢部(2)遺跡 右: 大和沢川と原石

## 川原平（1）遺跡の石器・石製品、土器について

齋藤 岳（青森県埋蔵文化財調査センター）

岡本 洋（青森県立郷土館）

### はじめに

青森県西目屋村川原平（1）遺跡は縄文時代後期後葉から晩期後葉の拠点的な集落である。津軽ダム関連遺跡群として晩期集落の全域が発掘調査されている。発掘調査報告書は、2017年3月までに全て刊行された。しかしながら、出土した石器・石製品・土器の中には発掘調査報告書に掲載を予定したものの、諸般の事情によりできなかった資料がある。筆者らが紹介すべきととらえた遺物全体の中の一部であるため、機会をみて報告したいと考えていた。

本稿で、資料紹介と共に考察を加えていきたい。

### 1 石器・石製品

図1には剥片石器と凹石、棒状の石製品、石製円盤を掲載した。

1は淡緑色の珪質頁岩製の石匙である。写真は本書掲載の石材についての別稿と深く関係するため23頁に掲載している。本遺跡から東に約20km離れた弘前市沢部（2）遺跡で類似した石材による石器製作が行われており、剥片・石核等が多数出土している（青森県教育委員会2018巻頭カラー写真）。つまみ部を作り出す剥離は浅く、アスファルトが付着している。2は、アスファルトの付着した削器である。刃部側に光沢が観察できる。3は、アスファルトが付着していないものの、光沢が観察できる側を刃部側と考えて、2と同様の置き方をした。アスファルト付着の削器は、秋田県内の縄文時代晩期遺跡に多いものである。本遺跡は弘前市薬師遺跡とともに分布の周縁地域にあたるので、より多く報告しておきたい。4は凹石で、5は棒状の石製品である。6～14は、石製円盤である。10は長さ158mmの大型品で、遺跡出土品の中で最大の大きさである。10は4とともに縮尺1/3で掲載した。

図2には石製円盤と石製品、写真のみの資料を掲載した。

1は全体が研磨された石製円盤であり、埋設土器(SR48)内の出土である。2・3は、小形楕円礫の全体を研磨したあとで、中央部分の片面を敲打により窪ませた石製品である。形状や加工状況に変異があり、全体を隅丸三角形に整えた扁平なものから、半球状の形状をとるものまである。2・3については、いずれも窪みが裏面全体まで及んでいない。筆者は、未完成というよりは完成品と考える。窪みの作出しが弱いものが存在する事は、遺跡内で製作されているためと考えたい。類例として十腰内（1）遺跡例（青森県教委1999図69-1）などあるが、本遺跡では、まとまった資料数が出土した。4～10は、写真のみで紹介する石器・石製品である。4は窪みのある自然礫を使用して器体の側面を敲打し研磨を加えた加工礫である。2・3を意識して形状を整えたと考えたい。9は板状の玉髓礫を素材とし、側面を両極打法で整えた石製円盤の破片である。欠損前においても形状は整っておらず、製作途中に破損した失敗品の可能性がある。青森県内では、石製円盤の未完成・失敗品等は、本遺跡の調査前は五所川原市金木の千苅（1）遺跡で56点（完成品8点）の出土が報告されているのみであった（齋藤1995）。川原平（1）遺跡では石製円盤の製作には両極打法が多用されていた。玉髓を石材とするた

め両極打法の痕跡として特徴的な、間隔の細かなリングが観察できる。10は直線や弧状の細い線が刻まれた線刻縫である。写真下部に、中央付近から下方向への二重の弧状の線がある。写真上部にも中央付近から上方向への弧状の線があるほか、上下の線をつなぐような縦方向の線も確認できる。器表面に擦痕が残る。

写真1には、東捨場（ブロック22；VA-53K III 2下層；8.4g）出土のアスファルト塊、南捨場の剥片集中域1（青森県教育委員会2016『川原平(1)遺跡II』；第564集第一分冊110頁）の報告で、点数のみ文章記述した碎片を掲載した。今回は詳細な検討ができなかったが、碎片の中には、バルブを持ち細部加工で剥落したと考えられるものもある。成形段階で生じたと考えられる写真掲載した剥片等と一括した資料体になるものであり、製作していた器種を考える手がかりとなるものである。

川原平(1)遺跡 石器・石製品観察表

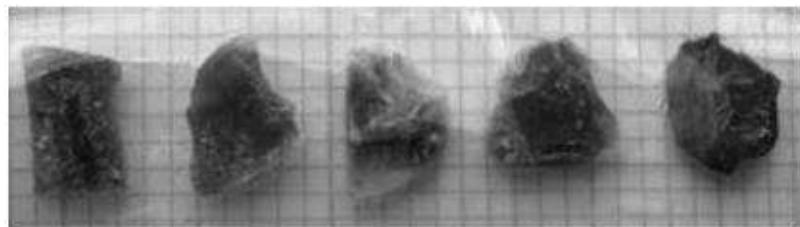
図 番 号	整理 番号	器種	遺構	出土地点	層	取上 番号	石材	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	備考
図1	1	4437	石匙	北東捨場	TR1-5	TR1-4.5	S-X	珪質頁岩	89.0	54.0	13.0	12.3 アスファルト、淡緑色、S-4167
図1	2	3880	削器	西捨場	VC-26	Ⅲ層上	S-X	珪質頁岩	(27.0)	(32.0)	8.0	(5.8) 光沢、アスファルト
図1	3	947	削器	西捨場	VH-28	I層	S-X	珪質頁岩	30.0	77.0	6.0	5.0 光沢
図1	4	8688	圓石	北捨場	VK-35	Ⅲ10層	S-X	凝灰岩	112.0	97.0	36.0	449.5
図1	5	4775	石製品	東捨場	IVU-54	Ⅲ層	S-X	未鑑定	41.0	6.0	6.0	2.4
図1	6	n2478	石製円盤	西捨場	VF-26	Ⅲ層中	S-X	未鑑定	35.0	34.5	15.0	29.5 アスファルト、縫隙
図1	7	3904	石製円盤	西捨場	VG-27	Ⅲ層上	S-X	凝灰岩	49.0	43.0	16.0	15.2 擦痕
図1	8	n294	石製円盤	西捨場	VC-25	Ⅲ層下	S-X	未鑑定	59.0	57.5	26.0	128.4
図1	9	11055	石製円盤	北捨場SN-B	VK-	I層	S-X	未鑑定	26.5	26.0	8.0	6.8 アスファルト
図1	10	5340	石製円盤	西捨場	VF-26	Ⅲ層中	S-X	凝灰岩	159.0	144.0	32.0	1373.6 大型品
図1	11	n1328	石製円盤	西捨場	VC-26	Ⅲ層中	S-X	砂岩	65.0	69.0	25.0	162.4 アスファルト
図1	12	11079	石製円盤	平場	IV0-41	Ⅲ層	S-X	凝灰岩	37.0	38.5	9.0	14.7
図1	13	11060	石製円盤	平場	IVT-49	Ⅲ層	S-X	花崗閃綠岩	40.0	40.5	18.0	44.6 アスファルト
図1	14	t186	石製円盤	M2	VC-38	I層	S-X	凝灰岩	50.0	47.0	15.5	40.6
図2	1	7729	石製円盤	SR48内	IVU-53	堆積土	S-X	凝灰岩	51.0	41.0	10.0	25.8
図2	2	不明	石製品	北捨場	不明	不明	S-X	凝灰岩	74.5	62.0	44.0	241.0 未製品？
図2	3	8499	石製品	北捨場	VN-40	不明	S-X	安山岩	77.5	67.0	53.0	319.9 未製品？、ブロック13
図2	4	7707	加工縫	平場	IVU-49	不明	S-X	デイサイト	102.7	92.5	43.5	406.3 石製品の未製品か
図2	5	1216	石匙	平場	IVY-51	Ⅱ層	S-X	珪質頁岩	29.5	57.3	6.9	7.6
図2	6	5455	石鐵	SR42内		堆積土	S-X	珪質頁岩	36.9	18.5	7.9	6.0
図2	7	2396	削器	北捨場	VL-41	Ⅲ炭C層	S-X	珪質頁岩	50.1	24.2	10.2	11.9
図2	8	1631	剥片	西捨場	VC-24	Ⅲ層上	S-X	珪質頁岩	40.2	26.4	5.5	3.4 アスファルト
図2	9	5212	石製円盤	西捨場	VC-25	Ⅲ層中a-1	S-X	玉髓	59.4	25.7	16.8	31.3 表裏縫面の板状縫を両極加工、失敗品か
図2	10	5344	線刻縫	M2	VC-38	I層	S-X	凝灰岩	90.9	61.8	9.4	64.5 二重線の弧状線、直線、細い線刻
図2	11	5591	石範	平場	IVV-40	Ⅱ層	S-X	珪質頁岩	93.1	56.3	19.1	74.0



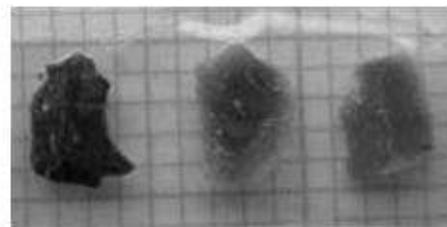
東捨場 アスファルト塊



剥片集中域 1 の碎片



剥片集中域 1 5mm 以上の碎片



4mm 台の碎片

写真1 アスファルト塊及び剥片集中 1 の碎片

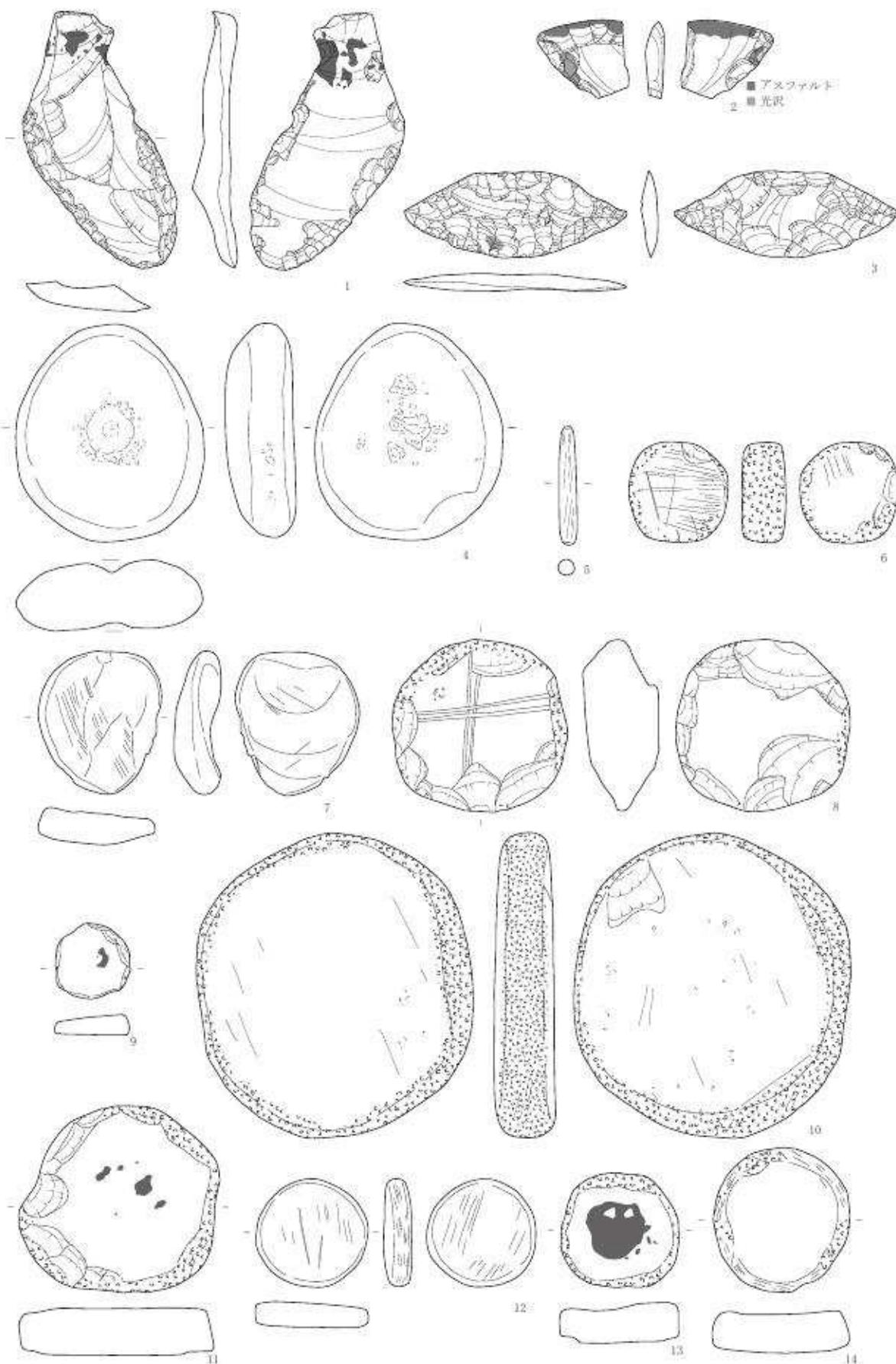


図1 川原平(1)遺跡 石器・石製品(1)

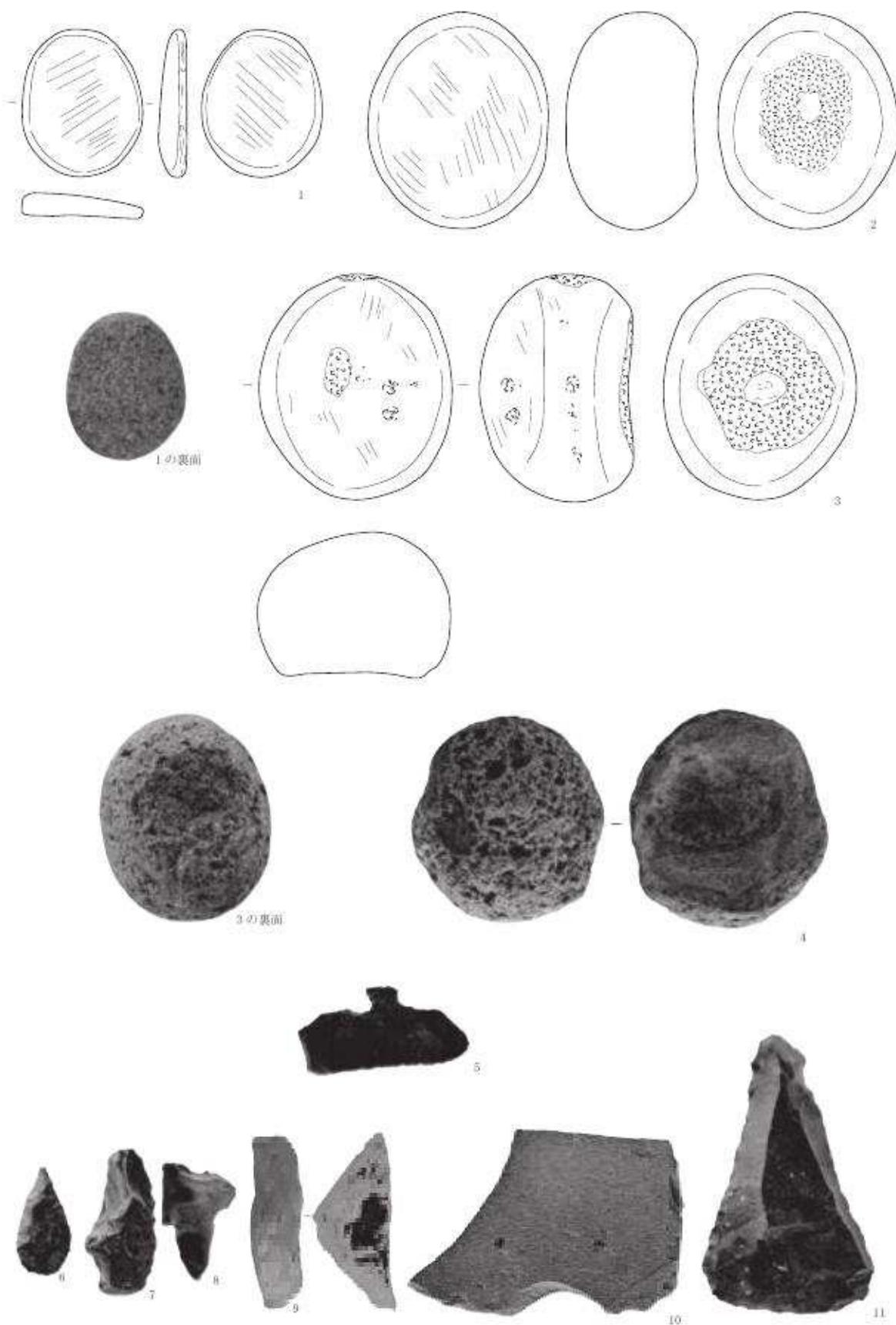


図2 川原平(1)遺跡 石器・石製品(2)

## 2 土器

川原平(1) 遺跡の整理段階では多数の興味深い資料を認めたが、破片資料の多くは報告書に掲載することができなかった。土器の製作過程等を考える上で重要な資料も含まれるため、このまま掲載外資料として収蔵されるのは残念である。作図および採拓ができなかったが補遺という形で取り分けておき、資料化については他日を期すものである。なお、写真掲載資料以外にも関連資料があるため、保管する点数を記しておく。土器の出土位置、帰属時期の記載は報告書の区分に従った。

【No. 1】

断面が白い土器



南捨場

1点

写真 2

【No. 2】

圧痕付土器



南捨場

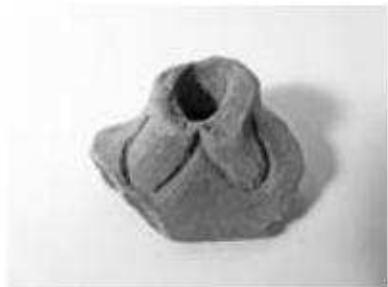
2点

写真 3

No. 1 は晩期 1 b 期の注口土器体部片である。縄文土器の断面の多くは器面より暗色だが、器面を黒色処理するものは断面が白い場合が多い。No. 2 は器面に植物種子の可能性がある圧痕が認められる土器で、写真 3 は後期 7 期の土器である。整理中は種子様の圧痕にはほとんど気づかなかった。

【No. 3】

注口土器



南捨場

2点

写真 4

【No. 4】

粘土付着土器



北捨場

1点

写真 5

No. 3 は晩期 1 期の注口土器片である。注口部下に粘土を貼付け二袋状の膨らみとしたものは少なくないが、それを沈線で表現している例はこれ以外にない。No. 4 は晩期前半の壺土器だが、内面に同一個体と思われる破片が貼付いており、器面と破片の間には由来不明の黄褐色粘土を挟んでいる。

【No. 5】脚付土器 西捨場ほか 3点



写真 6



写真 7



写真 8

No.5は晩期前半の壺や鉢で、底部に突起状の脚が付くものである。脚部は写真7のように内面から押し出されるものと、写真8のように粘土が付加されるものがある。突起状の脚をもつ土器は晩期2期に多いが、写真6は1b期に属するものである。

【No.6】  
漆塗土器  
南捨場  
2点



写真 9

【No.7】  
赤色塗彩土器  
北捨場ほか  
5点



写真 10

No.6は外面漆が塗られた晩期前半の壺で、写真9は土器内部の頸腔部界を天地逆に撮影したものである。漆塗壺の多くは、頸部内面にも漆が塗られている。No.7は赤色塗彩された晩期の浅鉢等で、赤色の発色が鮮やかである。水銀朱を使用した可能性があるため、今後の分析が望まれる。

【No.8】  
ブロック7  
出土土器  
南捨場  
5点



写真 11

【No.9】  
半精製壺  
南捨場  
1点



写真 12

No.8は南捨場ブロック7出土土器のうち漆塗膜が確認できるものであり、放射性炭素年代測定等に利用できる資料である。No.9は晩期1b期の半精製壺で、内外面（底面含む）に漆塗膜が確認できる。

【No.10】  
香炉  
南捨場  
1点



写真 13



写真 14

No.10は後期後葉の香炉である。写真14のように内面に炭化物が付着しており、内部で火を焚いていたと考えられる。なお、該期の香炉内面にみられる炭化物の付着については漆下遺跡（秋田県教委2011）で指摘されており、本遺跡でもNo.10以外の確認例がある（青森県教委2016）。内部では火を焚かないものと誤解されている香炉であるが、利用方法を探るための悉皆調査が必要である。

## 【No. 11】

粗い混和材の  
土器

北捨場ほか  
3点

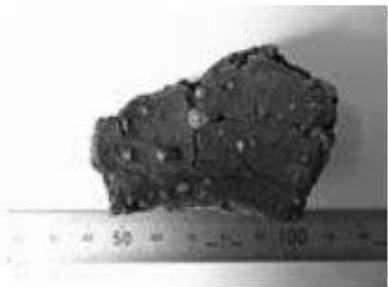


写真 15

## 【No. 12】

正面性のある  
粗製土器

西捨場  
1点



写真 16

No. 11 のように、砕いた石のような大粒の混和材が用いられた土器があり、晚期 5 期に顕著である。No. 12 は口縁に突起がある粗製土器である。1 本の短い粘土紐を貼付けて B 突起としており、精製土器との共通性から晚期 2 期頃と考えられる。突起は 3 個を一組として 1 単位が付されることが多く、器に正面があった可能性や、粗製土器と精製土器の製作者が同じであった可能性を指摘し得る。

## 【No. 13】

炭化物付着土器

北捨場ほか  
8点



写真 17



写真 18

No. 13 は内面に炭化物が厚く付着した土器である。このような付着のありかたは、本遺跡では晚期 5 期に多くみられる。

## 【No. 14】

異系統土器か？

西捨場  
1点



写真 19

## 【No. 15】

中空土偶または  
異形壺

西捨場  
1点



写真 20

No. 14 は西捨場 III 層上で出土した土器である。写真上方が口縁にあたり、小さな波状をなす。内面の調整が悪く、蓋のような形状であるかもしれない。文様モチーフは多重の矩形のようであり、続縄文土器の可能性もある。No. 15 は球状の体部をなす資料の一部と思われ、内面は粘土紐の接合痕が顕著である。外面は漆塗りで、縦方向の突起のようなものが付された角ばった形状をしている。

【No. 16】  
ケズリ調整の  
ある粗製土器

北捨場  
1点



写真 21

【No. 17】  
細かい縄文が  
施された土器

北捨場ほか  
5点

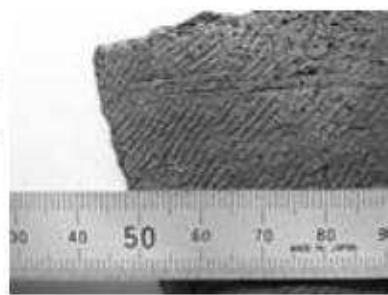


写真 22

No. 16 のように晩期の薄手の粗製土器には、縄文施文以前のケズリ調整が認められるものがある。写真 22 にみえる横方向の線も同様の調整であろう。No. 17 は縄文の節の長径が 1mm またはそれ以下の、細かい縄文が施された土器である。このような原体は、精製土器に多いが粗製土器でも用いられる。

【No. 18】  
沈線の施文手法  
がわかる土器

北捨場ほか  
6点



写真 23



写真 24

No. 18 は沈線の施文手法を知るための資料である。写真 23 のように後期の資料では、横位沈線の上方にのみ稜を残し、下方に稜が認められず沈線の立ち上がりが鈍角であるものが目立つ。晩期の精製土器は沈線施文後にミガキを加え、施文具の当て方がわからない場合も多い。小型土器が増え、何度も土器を持ち替えて施文するようになるためかも知れない。写真 24 は晩期 5 期の粗製土器で、沈線の上下に稜がある。

【No. 19】接合手法がわかる土器 北捨場ほか 28 点



写真 25



写真 26



写真 27

No. 19 は成形時の接合手法がわかる土器である。

写真 25 ~ 27 は晩期 1b 期の半精製壺の頸部で、同一破片である。写真 26 のように頸部文様が施文される帶状の部分が剥落しており、壺の成形後に粘土紐を貼付け、施文していることがわかる。写真 27 では貼付けた粘土紐断面の色調が、器体部分と大きく異なっていることが見て取れる。



写真 28

上方に体部を立ち上げている。台付と体部の接合面の狭さが、台部が写真 28 のように外れてしまう要因と考えられる。

後期後葉から晩期には台の付く器形が多く、破損して出土する場合は、写真 28 のように台部と器の内底面がつながったまま（コップや盃を逆さまにしたような状態）であることが目立つ。つまり、写真 29 のように体部・台部ともに中途まで残った状態、あるいは写真 30 のように台部のみドーナツ状に外れることは少ないとということである。写真 31 は台部と体部の接合状況がよくわかる例で、写真 32 はその極端なものである。これによれば、台部と底部は一体で成形され、内底面となる場所の脇に粘土を附加して、斜め



写真 29



写真 30



写真 31

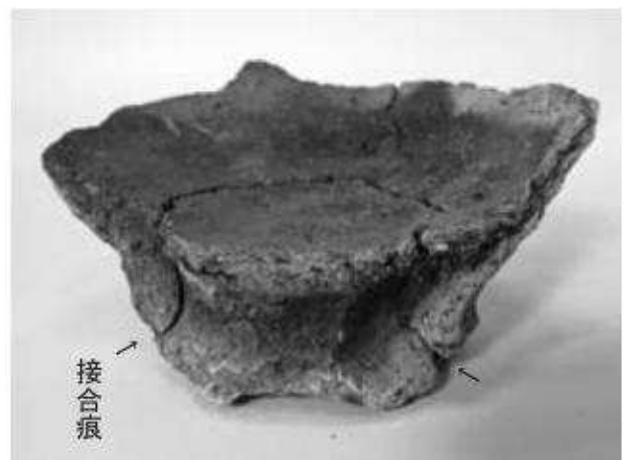


写真 32

## 【No. 20】爪痕や工具痕のある土器 北捨場ほか 9点



写真 33

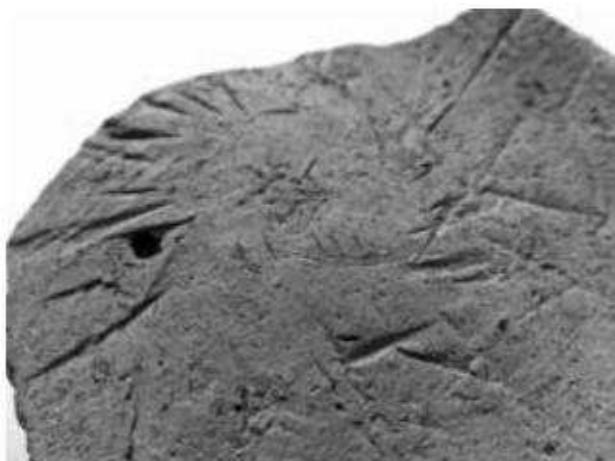


写真 34



写真 35

No. 20 は底部付近に残された爪痕や工具痕のある土器である。袋状の器形や底部が小さいものは成形時の痕跡をナデ消すことができず、意図せずに残ってしまったものであろう。北捨場の整理では底部をかなり観察したが、爪痕のある土器は少ない。写真 33 は、晩期 5 期の精製壺の内底面で確認された爪痕である。写真 34 も同じく底部中央付近に爪痕があり、体部を立ち上げる際についてしまったものではないかと思われる。写真 34・35 では幅 1 cm ほどの板状工具痕が観察される。いわゆる亀ヶ岡式土器の実測図では、このような工具痕、あるいは No. 16 のような調整痕が図化されることは少なく、該期の土器が実際にどうやって作られているか不明な点が多い。細頸壺では頸部から肩部の内面にかけて縦方向のシワが残るものもあり、成形時に粘土組を積み上げてから引き伸ばしたり絞ったりした可能性がある。

## 引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1999 『十勝内(1)遺跡』
- 青森県教育委員会 2016 『川原平(1)遺跡Ⅱ』
- 青森県教育委員会 2018 『沢部(2)遺跡』
- 秋田県教育委員会 2011 『漆下遺跡』
- 齋藤岳 1995 「円盤状石製品及び関係品」『千葉(1)遺跡』
- 齋藤岳 2015 「三内丸山遺跡の南盛土の剥片・碎片集中地点の石器について」特別史跡三内丸山遺跡年報—18—青森県教育委員会

---

**青森県埋蔵文化財調査センター 研究紀要 第24号**

発行年月日 2019年3月22日

発 行 者 青森県埋蔵文化財調査センター  
〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15  
TEL(017)788-5701 FAX(017)788-5702

印 刷 ワタナベサービス株式会社  
〒030-0803 青森県青森市安方二丁目17-3  
TEL(017)777-1388 FAX(017)735-5982

---





BULLETIN  
OF  
AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL  
ARTIFACTS RESEARCH CENTER

No. 24

---

CONTENTS

*The introduction of deer humeri pierced by hunting tools from Futatsumori Shell Midden (historic site).*

TAKABE Yuka

OYAMA Hikoitsu

SAITO Yasushi

HATA Kojiro

*Some studies about the making methods of stone tools and objects in Jomon period from the sites in the Tsugaru Dam area.*

SAITO Takashi

*The introduction of stone tools, stone objects and potteries from Kawaratai No.1 site.*

SAITO Takashi

Yo Okamoto

---

March 2019

AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL  
ARTIFACTS RESEARCH CENTER